ショパン 奇蹟の一瞬

聴きながら読む
ジョルジュ・サンドとの愛

高樹のぶ子 著

PHP

ショパン 奇蹟の一瞬
聴きながら読むジョルジュ・サンドとの愛

2010年5月10日　第1版第1刷発行

著　者　高樹のぶ子
発行者　安藤　卓
発行所　株式会社PHP研究所
東京本部　〒102-8331　千代田区一番町21番
生活文化出版部　☎03-3239-6227（編集）
普及一部　☎03-3239-6233（販売）
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/

印刷所
製本所　図書印刷株式会社

ⓒNobuko Takagi 2010 Printed in Japan
落丁・乱丁本の場合は弊社制作管理部（☎03-3239-6226）へご連絡下さい。送料弊社負担にてお取り替えいたします。
ISBN978-4-569-77782-5

ショパン 奇蹟の一瞬

聴きながら読む
ジョルジュ・サンドとの愛

高樹のぶ子 著

常州大学图书馆
藏书章

PHP

ショパン
奇蹟の一瞬
聴きながら読む
ジョルジュ・サンドとの愛

目次

はじめに……4
第一章 波が唱う夜 ノクターン第12番 ト長調 作品37-2……7
第二章 朱金色の哀しみ マズルカ第27番《パルマのマズルカ》ホ短調 作品41-2……15
第三章 僧院の雨と月 プレリュード第15番《雨だれ》変ニ長調 作品28-15……23
第四章 鳥と海の抱擁 プレリュード第21番 変ロ長調 作品28-21……31
第五章 水平線の棺 ピアノソナタ第2番《葬送》変ロ短調 作品35 より第3楽章……39

第六章 ヘーゼル色の幸福 幻想曲 ヘ短調 作品49 ……49
第七章 死者に届ける激情 ポロネーズ第6番《英雄》変イ長調 作品53 ……57
第八章 田園の戯れ ワルツ第6番《小犬のワルツ》変ニ長調 作品64-1 ……65
第九章 諦念のフォルテシモ 舟歌 嬰ヘ長調 作品60 ……73
解説 ショパンをめぐる人々 室田尚子 ……83
旅を終えて ……108
付録CD収録曲一覧 ……110

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

ショパンが音楽を作った、その場所や心身の状態を、もしや地続きのこととして見たり感じたりできるのではないか、是非ともそうしたいと願うのは、たぶんとんでもない間違いで、いくら創作の地に立ち、時空を超える翼を羽ばたかせたとしても、決して届かない場所に居る人だから、天才ショパンなのだと思う。

なぜこの状態で、この場所で、このようなものが生み出されたのか、深く胸に染みれば染みるほどに、それそのものを受け取るだけで満足できず、浸る喜びに飽きたらず、この花はなぜこの地で花開いているのかと、どこから飛来してきた種でその種にはどのような仕組みが隠されているのかと、妄想に乱れ、ついつい美の大本を求めて、種を割り花弁をひとつひとつほどいてしまいたくなる、性と言おうか宿命と呼ぼうか。

つまりは愚かな旅、どこにも辿り着くことができないと知って出かけた旅なのだ。

にもかかわらず旅先のこの酔いのほどや興まりの深々とした広がりを、それでも誰かと共に抱えたいと願うのは、たぶん私が、かの天才たちとはほど遠いながら、何かを創り送り出す人間、つまりこの旅の目的であるショパンとジョルジュ・サンドの愛の遺伝子を、ほんの一ナノグラム、いえ、サンドについては二ナノグラム程度、持って生まれたからではないだろうか。

音楽批評とはほど遠く、鑑賞と呼ぶには少々出過ぎた感性で、この本を書いた。

およそ百七十年昔の作曲家ショパンと、その音楽人生に強い影響を与えた、知的で豪腕なジョルジュ・サンド。その関わりは百七十年の時間が経ったとは思えないほど現代的だ。

王政復古や革命に揺れる騒然たる社会の中で、文化人たちは画家も音楽家も文学者も、垣根を置かずに、荒れ狂う外界からお互いの身を守るように、サロンに集った。集う仲間を思いやりながらも我が儘に自己を主張し、礼節を装いながら周囲の関心を奪いあった姿が、多くの書簡から浮かび上がってくる。

サンドはサロン文化の中心に君臨していたし、ポーランドから流れ着いて名声を得たショパンとの仲は、その可能性も限界も含めて、たしかにあの時代ならではの恋に違いない。

けれど彼らを、あのサロン的世界に閉じこめてしまわず、お互いが及ぼし合う芸術的な響きや男女の感情を、見方ひとつ変えて私たちのすぐ隣りに置いて眺めれば、古今東西、男女の関わりと情動に本質的な違いはないという以上に、極めて今風ではないだろうか。六歳年上の社交の花と草食系男子の組み合わせは、そのままトレンディードラマにさえなりそうだ。

マヨルカ島からノアンへの旅で、ショパンとサンドの交流の深まりを追いながら、私はこの時期に創られた曲に浸った。

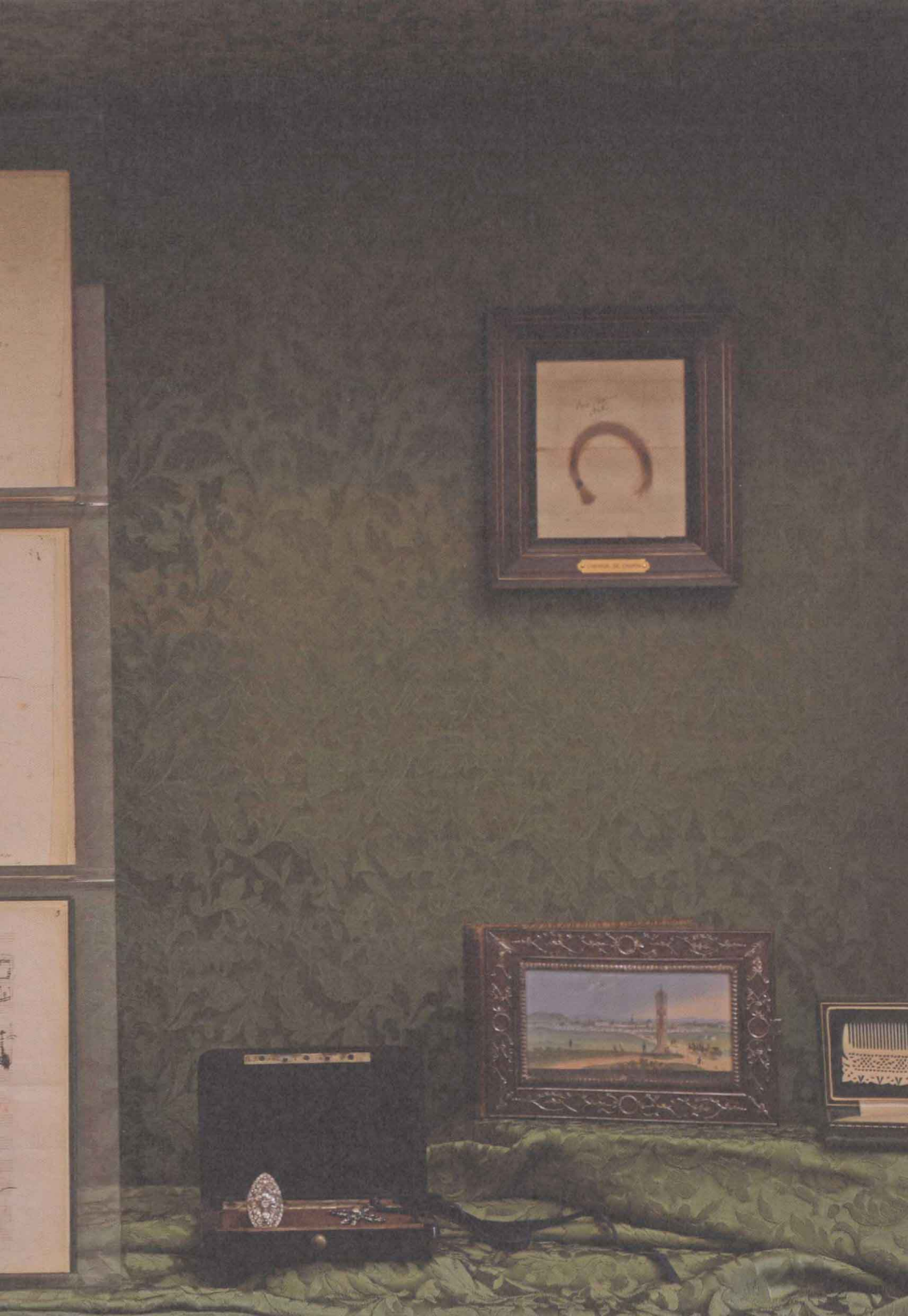
この曲はこの場所でこの日時に作曲された、と厳密に特定はできないので、あくまで仮想でしかないのだけれど、曲が生まれた時期や場所を、大きくは間違えていないように思う。また、曲が曲自体の力で、私の中にひとつの場面、男女の感情を生み出してもくれた。その意味では、ショパンとサンドの物語でありながら、ショパンが私の中に芽生えさせた、私の物語でもある。

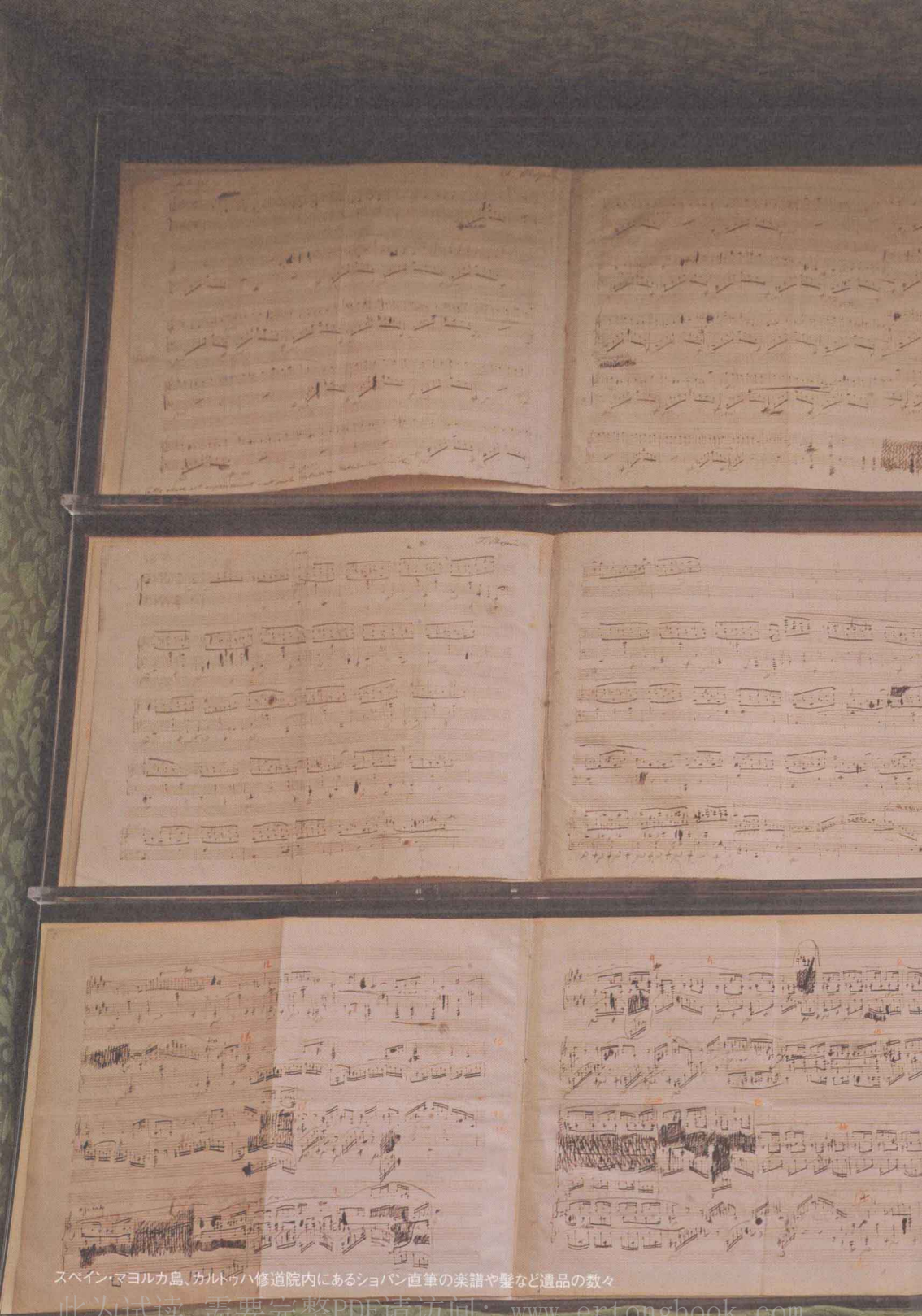
二人の交流を示す手紙や資料、証言のようなものは残されているけれど、音楽が生まれる瞬間や心理の

状況は、おそらく作曲家本人さえも記述などできない。
あえて言えば音楽そのものが心の記録であり証言集。そこから作曲家の情態や生理、愛情関係の微細を想像し、不可能と知りつつ言葉でもってその胸の内に入り込んでみる。それは批評や解説とは対極的な創造ではあるけれど、ショパンの音楽を愛する後の世の女流作家の、そして彼のような男性と出会えば間違いなくサンドのように、いえサンド以上に魅(ひ)かれてしまうだろう私の、百七十年の時を経た抱擁であり、心酔が極まった果ての恋愛作品でもある。
願わくば、山下郁夫さんと私の撮ってきた写真と文章が加わることで、彼の曲がより一層精妙な音色で皆様に届きますように。
風景と言葉と音楽を、同時に五感で味わってもらうことで、彼の音楽が内包する陰影が、さらに際立ちますように。
作品と作曲家の人生の関わりが、想像されうる因果関係を超えた未知の力や、説明不可能な幸運と悲運によって紡がれていることが印象づけられ、ショパンの三十九年の生涯が、より意味深く感じられますように。
さらには今後、その曲が流れてくるたび、一音一音に手繰り寄せられた風景や言葉が、彼の音楽を愛する人たちの胸の中に蘇ることがあれば、どんなに幸せだろう。
ショパンとサンドは、出会って良かったのか。サンドと出会わなければ、どんな音楽が残されたのか。
いま、ショパンの曲がこれほどまでに人の心を摑(つか)んでいるという事実が、すべての答えになっているのだと思う。

第一章 波が唱う夜

ノクターン第12番ト長調 作品37－2





スペイン・マヨルカ島、カルトゥハ修道院内にあるショパン直筆の楽譜や髪など遺品の数々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一八三八年十一月七日夕刻、ショパンとサンド一行を乗せた蒸気船エル・マヨルキン号は、バルセロナ港を出港する。

船は空に帆を立てて進む。前と後の大きな帆の間に立つ高い煙突が、黒い煙を吐いているのが見られたのは港を出てしばらくの間だった。

出港のときは朱色に輝いていた西の空もたちまち暮れ落ちて、機関音は低く静まり、ざざざと、船が波を切り分けて進む音や、たまに波に乗り上げたのち、落ち込むときのたぷたぷとした音のみがデッキに届いた。

夜が明ければ、マヨルカ島[※1]のパルマに着く。あと少し、わずか十五時間で、サンドがあれほど行きたがり、夢の地として語り誘ってくれたマヨルカ島に着くのだと思えば、ショパンの感慨は深かった。

ここまで辿り着くのに、長い旅路だったとあらためて思う。

すでにあたりは西も東も判らないほどの夜の闇。わずかに雲間から月の明るみが落ちてくるけれど、それはあまりに淡すぎて、波頭を光らせるほどの力もなかった。けれど吹き来る風はパリのそれとは違って、湿気を含んでいるので柔らかな布のようでもある。

ショパンは咳(せき)が出そうになると思い切り息を吸い込んだ。布のような海の風は、その乾いた肺の襞(ひだ)を潤(うる)ませ、鎮めてくれる。

パリを出て四昼夜馬車を走らせ、ペルピニャン[※2]でサンド一家と合流したときのことを、彼は船の側壁にもたれて思い出していた。

サンド一家とは、サンドと十五歳の息子モーリスと十歳の娘ソランジュ、そして小間使いのアメリーで、

二人の子どもは、離婚したデュドヴァン男爵との子だが、ショパンに懐いていた。
アメリーは夜更けたこの時間、二等船室に下がり、子どもたちは一等船室ですでに寝入っているだろう。サンドは葉巻が湿るのを嫌がって、デッキに出てこない。
彼女が傍にいない夜の海は、ショパンにさまざまなことを思い出させた。
パリから乗った馬車は、郵便馬車だった。ペルピニャンまでの二二五リュウ（九〇〇キロ）の道のりは、郵便物の他に三人の乗客が乗っていた。車体が軽く、三頭ないし四頭の馬が引くので、通常の乗合馬車より速かったが、その分悪路では容赦なく車体ごと跳ね上がった。
二リュウ（八キロ）ごとに置かれた中継所では郵便物の授受のほかに疲れた馬を替えたり水を飲ませたり、シャロンやリヨンでは乗客の乗り降り、御者の交代もあった。そのわずかな休息のとき、ショパンはほっと人心地ついて、先に旅立ち自分を待ってくれているサンドのことを考えた。いっときも逃れることのできない蹄の音、馬のいななき、石が車輪に絡まる音さえも、この道の果てにサンドの温かな胸がある、という思いに繋がった。
身体的には苦痛だったあの四昼夜も、ショパンにはもう、遠い出来事のように思えている。途中で息ができないほど咳き込み熱が出たのも、エル・マヨルキン号の乗客になってからは、ウソのように治まった。
ペルピニャンの宿に着いたとき、サンドはショパンを抱きしめて言った。可愛い人、どうしてこんな無理をしたの？　十日でも二十日でもこの宿で、あなたを待っているつもりだったのに、夜も休まず走り続けるなんて、なんてお馬鹿さんなの。
冷え切ったショパンの頬をサンドの頬と両手が、温めてくれた。

サンドの手の平はいつも柔らかくて温かい。サンドは魔法の手を持っている、とショパンは密かに思っている。あの手の中には、不思議な力が宿っているのだ。

これまで何人の男の頬が、彼女の両手で包み込まれたのか。

ショパンはサンドの身体の中で、ふっくらとした手の平が一番好きだった。触れていて安心できるのも、彼女の手の平だった。けれど彼は、そのことを一度もサンドに言ったことがない。

可愛い人、実は私も、貴方の身体の中で一番好きなのは、そのカタチの良い両手と指なのよ。

そう言われたら嬉しいだろうかと、ショパンは想像する。それを言うサンドの声には、ハッカ水のような刺激があり、おまけに逆らえない性的な呪縛の力があるから、聞けばきっと胸が苦しくなるだろう。マルリアーニ家のサロンで、ショパンが即興でピアノを弾き終えたとき、サンドは腰に馴染んだシルクズボンの裾(すそ)をしなやかに揺らしながら近付いてきて、ショパンの右手を持ち上げると小指に口づけをして言った。

フレデリック、貴方の小指は、きっと貴方よりも強いわ。こんなに強くてしなやかな右手の小指を、私は初めて見たの。

潤んだ目と母のような豊かで率直な表情が、まだピアノの椅子に腰を下ろしたままのショパンに向けられた。

男気取りのイヤな女が、あの瞬間に、女神に変わったのだとショパンは思う。

シャルロット・マルリアーニ[※3]をはじめその場に居た数人が、サンドの口づけと言葉に妬ましげに拍手をした。瞬間の感動をそんなふうにすぐさま行動に移すことのできるサンドに、あこがれと嫌悪の両方が渦

巻いた夜だった。

けれど自分だって、サンドの手が好きなのだ。小指ではなく肉厚のあのすべてを包み込むような手の平が。

ショパンは淡々と月明かりに滲(にじ)むエル・マヨルキン号の高い帆を見上げた。いま天国への階段のように、広くすっくと立って、夜風を孕(はら)んでいる。

彼らが十五時間かけて渡った海を、今はわずかな時間で空を飛んでいける。イベリア半島から地中海の小島への海路だけではなく、パリからペルピニャンへの馬車の四昼夜、さらにペルピニャンに着いたあと国境の港町ポール・ヴァンドールからバルセロナへの船での移動を含めても、飛行機の中で飲み物を一杯とサンドイッチを口にしているうちに、到着する。

わたしは飛行機の窓から、幾層ものピレネーの白い山並みが地中海に向かってなだらかに落ち込む様を右手に見下ろしながら、当時としてはもっとも速い移動手段だった郵便馬車が、時速わずか八キロだったことを思った。いまその百倍以上のスピードで動いていることを、奇蹟のように感じた。

その分、身体はラクだし、人生を多く味わうことができるのは確かだが、人との出会いや愛の深さ、執着の大きさを百倍知ることが可能かと言えば、むしろ逆だろう。今と較べて、一度の旅が意味するものや、人生に与える影響が、かつては百倍だったと考えることもできる。

エル・マヨルキン号は、馬車の中よりは快適に眠りを誘ってくれただろう、いや期待と疲れでショパンの身体は、いつになく鋭敏に目覚めていたかもしれない。

ショパンが船室に引き上げようとしたとき、船の後方から不思議な声が聞こえてきた。誰かが唱(うた)っている。男の低い声だ。

嗄(かす)れてはいるけれどやるせなく甘く耳に届く。船乗りが波と遊び戯れているような単調なメロディの繰り返しが、ゆったりと続いていて、波はときにひらりと飛沫(しぶき)を上げて高まり、そしてまた大海の静けさの中、深い沈黙の底に沈み込む。けれどしばらくするとまた、人の呼吸のようにそれは暗闇の底から現れるのだ。

ショパンは立ち去りがたいまま船べりに張られたロープにもたれ、その歌声を聴き続ける。右手の指が、声を追いかけて静かに動く。サンドが口づけした小指が、太いロープの上で、何度か飛沫のように跳ねた。

誰かが、何かが、長い旅を癒(いや)し祝福してくれているのだと、ショパンは感じる。

※1　マヨルカ島……西地中海に浮かぶスペイン・バレアレス諸島最大の島。一八二八年の冬、ショパンはサンドとともにこの島に滞在する

※2　ペルピニャン……スペイン国境近くの町

※3　シャルロット・マルリアーニ伯爵夫人……スペイン領事エマニュエル・マルリアーニの妻、一八二八年の春、彼女が主宰するサロンでショパンとサンドは一年ぶりに再会する

第二章

朱金色の哀しみ

マズルカ第27番《パルマのマズルカ》ホ短調 作品41－2

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com